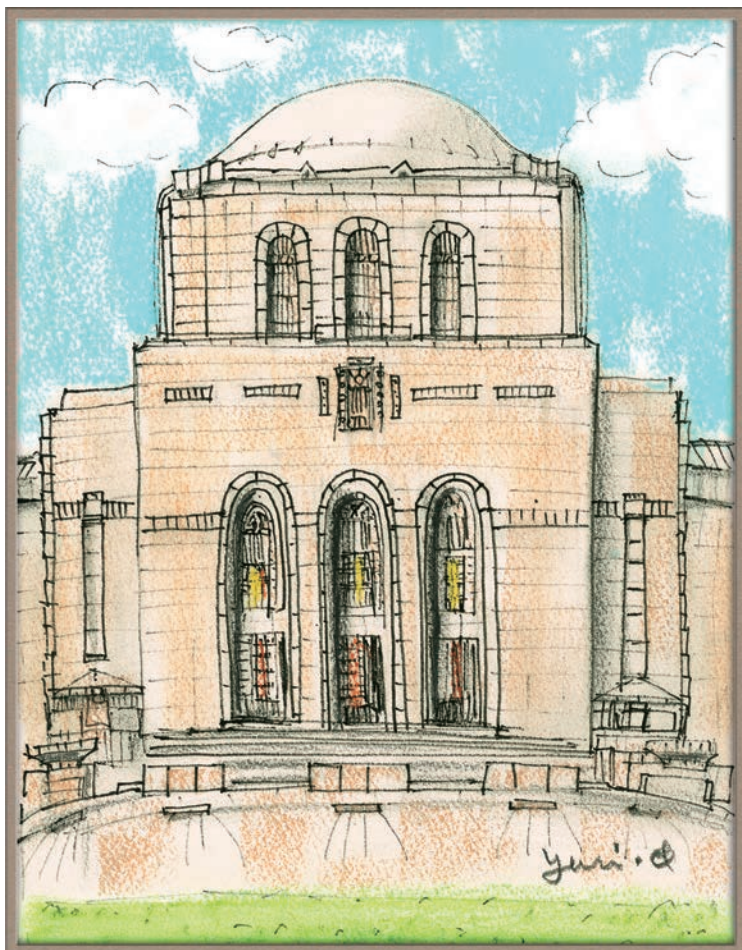


三河アララギ

平成二十六年

五月号

第六十一卷 第五号



ニューヨーク日記(91) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

January 23, 2014 : Iceland

Blue Shoe Diaries



アイスランドに来てみましたこの世じゃない感じでとても神秘的な場所。ここはガイザーがある所で温泉もあって何分おきかに吹き上がっていた! 冬の間は日照時間が少ないって言うけど思ったほどではなかったから結構ちゃんと「昼間」も経験出来た気分。あと結構意外なのはNYよりあったかいよ〜! それから食べ物が凄く美味しい!! クジラやパフィン食べてみました。全然イケる! そうそう、オーロラを観るために来たのよね。写真には失敗したけど素晴らしかったよ! その上満面の星空だった。いつまでも見ていたかったな〜

Came to Iceland!! It's such a beautiful and surreal place. Really, out of this world. Here's where the world famous Geiser is (which you can see it exploding into the air every 10 minutes or so). Most of the water puddles are actually naturally (lava) hot water so the steam gives the area a mystical feel. I was under the impression that the days are really short in the winter but there was surprisingly enough daylight to make it feel more "normal". What was more surprising was that Iceland is warmer than NY in the winter :D. And how amazingly delicious the food is. I got to try some whale (as a steak) and puffin! Oh and yes, the aurora! The main purpose of the trip!! Was incredible. and to complement that, the night sky full of stars was hypnotizing.

目次

第六十一卷第五号(通卷七二五号)

表紙 絵画館	今泉 由利 (1)
ニューヨーク日記(91)	Blue Shoe (2)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	大須賀寿恵 (4)
歌集「スモン」	岡本八千代 (5)
風巻吹けば	今泉 由利 (6)
桜桜桜	弓谷 久子 (7)
奥山の梅	青木 玉枝 (8)
想い出す日び	内藤 志げ (9)
スズメノカタビラ	林 伊佐子 (10)
三月の山	安藤 和代 (11)
地球儀	佐藤 喜仙 (12)
かたかごの花	伊藤 忠男 (13)
春きたれども	遠藤 脩子 (14)
著我 ^{しきが}	鈴木 孝雄 (15)
笑顔が増せり	足立 晴代 (16)
日の本の	胃甲 節子 (17)
ミモザアカシヤ	清澤 範子 (18)
分け合ひて	小柳千美子 (19)
こでまりの花	森岡 陽子 (20)
神木	近藤 映子 (21)
弥生となり	伊与田広子 (22)
好物	半田うめ子 (23)
クリスマスローズ	富岡 和子 (24)
春耕	杉浦恵美子 (25)
何時も淋しい	平松 裕子 (26)
雪柳	平松 裕子 (27)

貝母百合	つぎ添ふ
挽歌	雪
紺碧の空	春一番
『俳句』	『歴代天皇御製歌』(二十四)
『ことよせ』	『かさね』の一句 四月号
私の一首	

ある自然科学者の手記(24)	貫名海屋資料館(33)
絹の話(42)	いーはとぶ(34)
物理学者と詩歌の世界(52)	胃甲 節子(36)
短歌に詠まれた茂吉	伊与田広子(38)
楽しい時間(18)	岡本八千代(39)
子規の短歌革新とアララギの歌人(22)	小野可南子(39)
茅場町また亀井戸(2)	大橋 望彦(40)
「氷魚」のことから(160)	今泉 雅勝(42)
ことのはスケッチ(425)	鮫島 一石(44)
編集室だより(二〇一四年三月)	山本紀久雄(46)
和菓子街道(91)	佐藤 喜仙(48)
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	夏目 勝弘(50)
	岡本八千代(52)
	今泉 由利(53)
	平松 温子(54)
	平松 温子(55)
	平松 温子(56)

山口千恵子(28)	山口千恵子(28)
小野可南子(29)	小野可南子(29)
夏目 勝弘(30)	夏目 勝弘(30)
秋山 逸穂(31)	秋山 逸穂(31)
阿部 淑子(32)	阿部 淑子(32)
白井 信昭(32)	白井 信昭(32)
植村 公女(33)	植村 公女(33)
貫名海屋資料館(33)	貫名海屋資料館(33)
いーはとぶ(34)	いーはとぶ(34)
胃甲 節子(36)	胃甲 節子(36)
伊与田広子(38)	伊与田広子(38)
岡本八千代(39)	岡本八千代(39)
小野可南子(39)	小野可南子(39)
大橋 望彦(40)	大橋 望彦(40)
今泉 雅勝(42)	今泉 雅勝(42)
鮫島 一石(44)	鮫島 一石(44)
山本紀久雄(46)	山本紀久雄(46)
佐藤 喜仙(48)	佐藤 喜仙(48)
夏目 勝弘(50)	夏目 勝弘(50)
岡本八千代(52)	岡本八千代(52)
今泉 由利(53)	今泉 由利(53)
平松 温子(54)	平松 温子(54)
平松 温子(55)	平松 温子(55)
平松 温子(56)	平松 温子(56)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

雨にまだ散るを耐へゐる花の下に足撫でらる我は老いたり

P 1 0 0

軟らかきちび筍の秀を噛みて八十五われの生れし日なり

P 1 0 2

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

喫ひさしの煙草を湯呑に消しながら退職勧告受けし人立ち上る

脱げたるをおぼえずなりし吾が足に厚きソックスの重ね履きをする

浴槽にまなこ閉ぢつつ浸りをり土間の浅蜷の塩ふくきこゆ

桜桜桜

東京 今泉 由利

鶯はきのふお山をいでこしか河津桜のまだ三分咲き

七つ八つ桜の花びら積りゐる透明の傘傘さしてゆく

天の桜散り散る桜地に桜心にも積み桜桜桜

帰り来し私の部屋にひらひらと桜花びらもう一度散り

まんまるの窓辺の月の引力に静かに静かに引かれてゐるよ

ペテルギウスの超新星爆発は過去か未来かオリオン星座

殿ヶ谷戸に湧きいずる水透明のやがて野川となりゆける水

お浸しにせしことありきむらさきのカタクリの花ほの甘かりき

極限のお姿にして五百羅漢おひとりおひとりお話ししてゆく

神様の御前にありて幾百年角材となる榊とどきぬ

奥山の梅

豊川 弓谷 久子

久びさに海眺めつつ帰り来ぬこの海恋しと君歌はれし

満開の桜の便りに魅かされて今年も来て見る奥山の梅

奥山のから池跡に歴史あり西方古塁とするべ建ちゐて

如何なる人等の生活ありしか天正の昔を偲ぶ古塁に佇ちて

雨もりに悩みし年月永かりき屋根の修理も今日にて終る

早朝をバス旅行にと子は発ちぬ雨の京都の一日とならむ

お彼岸のお中日がたち日なり今日母逝きし日と姉に告げたり

心不全と告げられぬくもり残る手をにぎりゐたりき母の片へに

故郷を父母を語れば心の通ふ父似の姉と母似の我と

鶯の声透り来ぬしらじらと今朝の御津山かすみの深し

想い出す日び

新城 青木 玉枝

始めての孤独ひとりの詫しき味はいて弥生三月間もなく終る

集団たつきの生活の中にしみじみと嫁の優しさ想ひ出す日び

心に問ふ何故伊丹をば出て来たの何不自由なき私の部屋より

七階の朝夕眺めし六甲山播磨はりまの海へ流れゆく川

寝椅子にて窓より見ゆる伊丹くこう空港の棧きに夢たくす海外の夢も

山里に再び春を迎へたり山並遠く雪は消えずに

見上ぐれば赤き椿の花一つわが手にポツリ受くる嬉しさ

朝風呂のデイーの湯舟につかりつつ湯けむりの中安らぎてをり

ゴトンゴトン飯田線にゆられ行く彼方の山の真白きを見て

石段を運転手さんに助けられ墓石はかいし清めお花と大福もちを

スズメノカタビラ

豊川 内藤 志げ

枯れ芝に緑の目立つスズメノカタビラ芝を分けつつ掴み拾ひゆく

畝の端に一人休みぬほとけのざスズメノカタビラナズナの花束

門径の藪の椿に背のびして枝引き寄すも花に届かぬ

姉さんは子年生れの九十歳と確かに数ふ寝たきり七年

玉蜀黍のトンネルのビニール飛びしまま明日は霜かと夫はつぶやく

何一つ動くものなき窓の外沙羅の冬木の雫の落つる

沙羅の木の横に一列水の玉五つが並び一つが落つる

最後まで礼を尽され斯く迄も潔きかなあ、松井様

黄梅を詠まれその名を教はりしわが庭中に黄の色清し

痛む腰を堪えて笑顔にアララギの御津の歌会へ共に喜び

三月の山

岡崎 林 伊 佐 子

立春のあした漲る日の光榎木のきのこもすくすく育つ

榎の木を伐りたる跡の汁を吸ふ羽虫みつけり三月の山

榎の芽の白く輝ふ春の山雑木も芽ぶき春が訪れる

榎の木を伐りて並べる椎茸の人工栽培は老いのたのしみ

杉の葉は杉の葉らしく地に朽ちて空の余光があまねく照らす

羚羊の食餌とも椎茸の榎木に夫と糸綱を張る

生きて行く証ともなる四季の里短歌はわれの一生を点す

広告の裏白メモに畳みをく下手な短歌の推敲かさねる

耳鳴りはつねの声とぞ素直なる心に聴きいる一生の証

鋤一丁たよりに野菜を培ひていつしか鋤の角も減りたり

一日の仕事を終へて帰る時西陽はとなりの町に沈みぬ

地球儀

豊川 安藤 和代

日溜りに寄り添いて咲く蒲公英の花小さくも色の深けれ
幼二人スカート裾なびかせてぶらんこ揺らす庭は春めく

苦しみも楽しみであれ歌を詠む下七文字に悩める夜半

書いて消し消しては書いて汚れたるそこから私の一首生るる

子が使い孫の使った地球儀は五輪の国を巡りていたり

菜花をばゆでればほつほつ花芽見え厨はすでに春が来ている

孫のリコーダと吾のオカリナ十五回目やつと合いたり荒城の月

夕暮れて温室に明り灯り初むひたすら菊を眠らさずをり

時来れば唯一心に餌を待つ飼い犬の目のひかり鋭し

朝夕見る弓張りの山脈採石場広がり広がり形崩れゆく

かたかごの花

東京 佐藤喜仙

国分寺の小さき苑の傾斜地に可憐に咲きしかたかごの花

八年前大島に行き記念にと帰りの土産椿満開

雪の朝予想を越ゆる積雪で玄関のドアなかなか開かず

プーチンはソチで平和の顔をして本性見せるクリミヤ併合

日本画の伊東深水の居宅あと今は見事な梅林となり

若き日にアンネの日記読みしあと胸に湧きたる熱き思ひよ

車中にて袴姿の女の子見て卒業のシーズンと知る

詩人逝きぞうさんの歌思ひ出す歌ってくれた母の美し

やわらかき光がおほふ梅林に紅白梅が咲く我のため

陽炎の中から翼あらはれて津波後はつの娘の帰国

春きたれども

大阪 伊藤忠男

春風に心誘われ外に出る春の日まだなり小雪ちらつく

夜の中に積もりつもった牡丹雪朝踏む道を遮る轍

降り続く空を眺めて滅入る日も春呼ぶ兆しならば笑顔に

突然の春の陽気に慣れぬのか体の異変あちらこちらに

水求め探し探して立ち寄りたそこに泉が今日の儀式に

松明に込めた願いは水汲みて無事に届けることのみなりや

ウクライナ剣突き合わせにらみ合う昔のままか智恵なきものを

今どこかマレーシアからミステリー時立つほどになほ不可解に

計算機片手に出かけ買い物も小銭たまりて重たき財布

愚痴こぼし一日過ぎて振り返るやはり薄着は肩軽ろきこと

著^{しゃ} 莪^が

蒲郡 遠藤 脩子

二十五・二十六と声に出しつつ家までの坂道を登る一步一步

朗読が音訳となりてわが録音ボランテニアも変りゆく気配す

おおかたはCDとなり聴取者のテープ利用も少なくなりぬ

新しき機器に馴染めぬ我も又テープ利用者に添ひてあゆまむ

後席の友人ふたりの歓声を渡り終へたりブルーブリッジ

上衣ボタンのかからぬままを気にしつつ「たんぽぽ」竣工式の列に連なる

ブラウスの襟元さびしと付けきたる水晶のネックレスわが首に重し

ゆらゆらと樹下に揺れゐる白きもの著莪^{しゃが}の広葉の陽に光るなり

ロゼットの真ん中まんなまる蕾三つ栄養たつぷりわが畑にタンポポ

ありがとうの言葉を添へて絵手紙届く淡いピンクのにおい椿

笑顔が増せり

沼津 鈴木孝雄

しだれ梅下からゆつくり見てくださいふくよかに花天まで伸びる

鷲頭山の登山道脇にスマレ群れ淡い紫陽を受けて咲く

春一番次々寄せる白い波カモメはさらりとかわしホバリング

春嵐カイトサーフィン風に乗り競い舞い飛ぶ赤青緑

愛子さまに勇氣もたらし沼津の海その砂浜を今歩き居る

沼津市で初の小中一貫校立派な校舎に魂入れよ

ベンツより降りた一人のご婦人が道端に散りしゴミ拾い集めり

ジャガイモを半分に切り浴光す畝も耕しさあ植え付けた

根深ねぎ土寄せの嵩も高くなりそろそろ良いよと言いたげに

二ヶ月ぶり母を施設に訪ねけり介護の厚さか笑顔が増せり

日の本の^{もと}

東京 足立 晴代

春未^{いま}だ遠くにありて待ち望^{のぞ}むふくらむ蓄^{つほみ}数え数^{かぞ}えて

日の本^{もと}の国の誇^{ほこ}りの桜花咲^さく花散^ちる花美^{うつつ}くしきかな

荷の中に埋^{うづ}もれし吾こゝにあり片付^{かたつ}く部屋を思いえがきて

天袋高きにありて人頼み茶道具納めほつと一息

待ち望^{のぞ}むテレビ番組見ながらもハツと見開く最後のシーン

箱の山やつと開きて中の品納める先はいつこなりやと

引越しの前にうたいし短歌^{うた}いづこ三度^{みたび}したゝめ三十首とは

老体も氣力に満ちて働けば未^まだ未だ元氣と思ふ吾なり

重き物力にまかせ持ちたるが老いも腹筋のびたりしとか

想い出の多き品々並べ見ていづれを捨てしと迷う吾なり

ミモザアカシヤ

豊橋 胃 甲 節 子

想ふのみ彼岸の墓参も出来ぬまま甥っ子独りの生業案じぬ

言葉少なき吾と異なり話し好きの姉だった事しみじみ懐かし

神田川堤に群れ咲く紫すみれせめて一度は見に行き度くて

鶯の初音聴きたる其の後は啼く音聴く日の無き寂しさよ

十一年も何処へも行けぬ吾乍らミモザアカシヤの華やぎ想ひをり

今日一日体はいたく疲れ果て食品買物片付けてより横たふ

物なべて飛び行く如き強風のベランダに三度の洗濯物取込む

お隣の大木と育ちて柔らかき杏のピンク膨み来たりぬ

洗面所に活ければ愛らしき沈丁花高き香りの満ちみちてをり

稀々の雨は優しき春の雨音さへも無く滴はきらり

分け合ひて

春日井 清澤 範子

前立腺ガンの検査に夫と乗るバス停の公園紅梅真つ盛りなり

庭にある赤白混りの椿の中深紅と真白の花南を向きて

椿咲き小鳥の声は賑やかにわが家に春は訪れにけり

廊下の雨戸夫は静かに開けにけり真紅の椿ほら咲いたよと

三寒四温今日暖かき春らしき菜の花のおひたし分け合ひて食む

低気圧に風強く吹く玄関の木犀の若芽幾分散らして

雨の日は神社へも行けず廊下より庭の椿を長く長く眺めてをりぬ

庭の方より鶯の声しきりなり心を強く持ち最善を尽そう

夫の耳遠くなりたり吾が声を大きく大きくやつと聞こゆる

枯薄は茫々とゆれ風にゆれ根元より青草芽吹きてをりぬ

いじまりの花

東京 小柳千美子

武蔵野に湧水の庭訪ひにけり春のうららに浮き立つ心

出迎えしかんひ桜に豊後梅今を盛りと色を競へり

丹精の心つくさる大芝生小鳥集ひてあまねく光

荒むしろ敷かれし上をふかふかと石段下る竹の小径へ

さやさやと誘ひし風に見上ぐれば竹の林は黄金の色に

ハケに咲くかたかごの花愛らしくひとつふたつと風の数へる

石段を登りつめれば馬頭尊供養の心今に伝へる

湧水のきらきら流る岩の間に紫淡くすみれ花咲く

もみぢ葉の芽吹きの中に茶室あり飛び石白く誘ふが如し

靴脱ぎて部屋にくつろぐ清しさよこでまりの花白く垂るる

神木

東京 森岡陽子

雨の朝おなかさすつて応援す友の愛犬私は産婆

寒なごむ水仙の花ほんのりと甘い香りに心地よく酔う

クルクルと廻るジャンプの三回転ソチの星空輝きをまし

伝説と言われし彼の飛ぶを待ち駆け寄る仲間もメダルが掛かり

松の木や椿の木々も雪で折れ積るる枝葉哀れ悲しく

見得を切り花形役者が舞台上白浪盗賊五人の姿

神木の樹齡二千の大欒栄枯盛衰見詰め生きぬく

巣立ちした小さな鶯五羽六羽河津桜の蜜に集まり

夜の深けし静寂時に風さやぐ竹さやさやと朝まで揺るる

此処あそこ土が盛らるる園の中啓蟄迎へ土竜にも春

弥生となり

名古屋 近藤 映子

午後なれば「行かなければ」と吾立てど見舞ふ我夫もう居ない

豊川市八幡西明寺夫の忌明は四月の始めかと思ひ

突然に吾右眼の見えずして脳神経内科吾入院す

夫逝き悲しむ間なく吾自身入院となりてしまひぬ

夫逝きて十日余りに吾も又入院なるとは娘よあわれ

わが背の真中に直角に太き針麻醉有れどもその痛み

神経伝導検査とか前日吾は眠れぬ夜となりたる

われ「フィッシャー」と言う脳細胞免疫異変の緊急入院となる

九日目日曜自宅帰宅の許可下りぬ眠むれそうになし

わが腕に点滴口は取付られし毎日三時間の続く

好物

豊橋 伊与田広子

床に入り先づ膝温む歩く時膝の痛みの起らぬように

一週に一度は近くのスーパーへ菓子など甘き物買ひて仕舞ひぬ

われの側そばに母の居るやうな感のあり好物なりし団子供へたり

建物は高く建ち込み町中まちを鬼走る騒ぎ聞へなくなりしか

出世せば出世する程厳しかり発言するはよく考へて

外出をすればわが町気にかかる廻りの町はわが町より高し

押し寄する津波の高さ時間など三河湾に入る海水の量

地震にて家傷つかねば二階にて様子を見るが安全と思ふ

あちこちと桜のたよりありたりて膝の痛もやわらぎにけり

寒さ去り今朝けさから大雨止みたれば桜見に行かむ豊橋公園

クリスマスローズ
新城 半田うめ子

庭中に今年も又雪の舞ひ咲きてゐるなりクリスマスローズ

矢部にての植田先生時折り食品を下さる親切であり

杉山の植田と言ひ吾の事死んでゐるとの言ひて居りたり

雪の舞ふ前畑に咲く白きなるたんぽぽの花のひと花咲きぬ

常々に吾にやさしく杉浦様線路にて永眠残念なりぬ

コトコトと音のするなりねずみが石けんを引きて行くなり

安形^{がた}様牧野先生と友人なりもう会へません牧野先生

無念なる声を聞きたり松本^{まつ}のサリン事件幾年前か

楽しみて居りたるなり老いぼけて源氏物語の日間違ひたりし

春耕

東京 富岡 和子

贈られし大内雛に朝日さす半世紀過ぐ亡き義姉しのぶ

菜の花やスーパ―棚にお目見えし我が家も芽吹く去年の種子の

おかしいよ友らと愛でる犬ふぐり誰が言い始むブルーの小花

甥の娘は喜寿のわたしを姉さんとうれしい呼び名余所はかまわず

デートする庭の小花を祝とし進級うれし小学一年

弥生はる両度の雪に冬眠が年令としをつらつら永きにわたる

ダウン着て雲なき空の十三夜隣り人らとウオーキングへ

春耕のシャベル持つ手は楽しかりゆく刻早し五時のチャイムは

同日に春一番と彼岸入りつきぬ話題は異常気象

青天に辛夷こぶしふくらむ谷中墓地伽藍の瓦白々映えて

何時も淋しい

蒲郡 杉浦恵美子

我にのみ思い出遺して夫は逝きぬ語り合ふこと永遠にないまま

思ひ出は語らひてこそ懐かしいゆゑにわたしは何時も淋しい

夫逝きて最初の冬はこの部屋に籠つてばかり居たっけわたし

それが今糸の切れたる凧みたい気儘に今日も名古屋の街角

本当に百橋描かれてゐるかしら北斎展の百橋図には

おそらくは我が人生の一番の澄みたるときと今は思へり

だがしかしひねもす仰臥もこれもまた世の中からは隔たるような

ひとり居は健康管理が大切とはからず気付く風邪の仰臥に

この春に我が最後の入学の面接したる生徒等卒業

この春にて我も到頭高校との関はり凡てなくなりました

雪柳

豊川 平松 裕子

植ゑずとも殖えゆく庭の雪柳枝先までも花に包まる

トンネルに入り雑音となるラジオ染井吉野の話し途切れり

白の側紫の側と分け植ゑる木蓮並木の朝のすがしき

満開の白木蓮は左路肩未だ蕾の紫は右

木蓮の並木道にて朝となりぬ我が峡を出で七十五キロ

受け継ぎて咲かせゆかむと決めてをり君より我に来たりしサギ草

我にできるたつた一つの供養なり受け継ぎゆかむ君がサギ草

芽の出でぬ鉢に水を注ぎをりただただ祈る芽よ出でて来よ

ポツポツと滴の落つる音続くどこに落つるか立ちて見にゆく

夜べよりの雨は止まざりポツポツと滴の音す春の日の雨

貝母百合

豊川 山口千恵子

石路の花呆けつつ春になる何ごともなき毎日であれ

海抜七米の標立ちるる四辻を曲りて今日のウオーキング終へ

掻き取りゆく紅の花咲くホトケノザ畑の黒土に花零しつつ

粒々と器の中に盛り上がる一夜浸せる大豆一カップ

人参を今日はころころ賽の目に刻みて入るる煮豆の中に

干し上がる切干し大根集めぬる香り漂ふ午後の日の中

休耕の田に青あをと麦生ふる寒さの残る風に吹かれ行く

三月のわが誕生日の花貝母百合群れて生ひきぬいつもの処に

終日を寒の戻りの風の吹く白々光る木蓮の花

吹く風の花びら二三片散るも良し小彼岸桜の満開の下

つき添ふ

豊川 小野可南子

譫言^{うわごと}か寝言ならむかタミフルに深く睡れる佑真に添ひぬ

インフルエンザの孫を預る今日の日よ窓を時折開きたりして

夕べには熱もさがりぬ早もはやもつき添ふババを笑はせもする

黄連雀か緋連雀かは定かならずシルエツト見ゆ夕の日の中

もうすぐに二年生となる児等と今日の下校はシリトリしつつ

なかなかいたのもしきもの一年生世界の国のなまえつきつき

足弱き一人にそつと手を副へるこの女の子を見守りゐたり

かそかなる風のあるらし雪割草の白の小花の小さくゆるる

朝の日に輝き放つシーグラス少女千尋と砂浜を行く

春草の闌^たけてひろぐるを手に分けてアスパラガスの緑すつきり

挽歌

豊川 夏目勝弘

線香を机に立てて向ひみつ乱るる白檀の煙りを見つむ

白壇の薄青き煙りは乱れつつ雲なし漂ひ我をつつめり

白壇の香の煙りは羽衣のごとくときには薄絹のごと

ふくよかな御仏つつむ絹布なす香の煙りに念ひめぐらす

千変の形に乱るる香煙も直ぐなる一条の線なすときあり

たちのぼりそして消えゆく香煙の消えゆく先を知りたく思ふ

白檀の香の煙りのたちのぼりたちまち消えて薫りを残す

春となる雨のあがりて本宮の谷より立ちたつ細き白雲

たちのぼる白き筋雲は本宮の峰を越えゆき西に漂へ

本宮の山にたちたつ筋雲に仏子に還れと祈り見つむる

雪

「招待」 秋山逸穂

風受ける細かな雪の縞模様つぎつぎ窓辺を流れゆくなり

うずを巻き流れる雪に音はなく監視カメラはこきざみにゆるる

町内の時刻を知らせるチャイム鳴り雪降る今日は夕暮れ早し

綿雪は街空一面うめつくし鈍色淡く広がりにゆく

通過する新幹線にあおられて雪は激しく巻きあげられぬ

白白と乾く畑土舞いあがり煙のように陽射しにむかう

両側の芽吹く柳をなびかせて吹く夕風の暴言やまず

上着脱ぎ土手の斜面に寝ころべば芽を吹く草のかすかに匂ふ

かんばせに赤すじ黒すじぬりあげて黒目きびしく見得をきるなり

スプーンにて中骨肉を削いでゆくまぐろつややかに甘そうに見ゆ

紺碧の空

横浜 阿部 淑子

無農薬で育てられたる小松菜の茹りも早く甘味ひとしお
消費税上る前にと買い急ぐ人の動きを是といふべきか
風雪の悩める冬をくぐり抜け紺碧の空に小鳥さえずる
坂道で転倒の我起き上りよくぞ耐えたと骨を労る
亡き友の庭に咲き満つ沈丁花春風運びし香り淋しく

春一番

豊川 白井 信昭

前芝の今に伝える燈明台河口の沖に思いを馳せる
荒風に押さるるままに堤防を佐脇大橋にはや差し掛かる
道端に日毎蕾は膨みて黄梅の花満開近し
吹き荒れし春一番は過ぎゆきぬ雪柳まだ芽吹かず

『俳句』

アリゾナの俳句の話しやぼん玉

植村 公女

忘れぬ短歌一首や春落葉

三月やポケットに入れる文庫本

三月六日に「植村直巳冒険館」に皇后陛下がお出になりました。その節、歌集「瀬音」を頂き、植村を詠まれた歌を教えて頂きました。

「若くしてデナリの山に逝きし人春の落葉を踏みつつ思ふ」

(デナリ＝マッキンリー アラスカ・北米大陸最高峰 先住民デッイア族の「偉大なもの」の意)

「歴代天皇御製歌」(二十四)

貫名海屋資料館

『陽成天皇』第五十七代・在位八七六年(九歳)ー八八四年(十七歳)

陽成天皇は、清和天皇の第一皇子。九歳で清和天皇から讓位された。父上皇、母高子、天皇の伯父(藤原基経)が政務を握った。十七歳で退位。六十五年間の上皇歴をももつ。

八七三年、清和天皇の御代、皇子、皇女に「源氏」の姓を得、「清和源氏」はここより。

在原業平、六歌仙が活躍。「六国史」「日本文徳天皇実録」など、藤原基経等の撰により成った。

百人一首に、陽成天皇の唯一の和歌が採用されている。

筑波嶺の みねより落つる みなの川 恋ぞつもりて 淵となりぬる 「後撰和歌集」

落つる＝流れてくる みなの川＝男女川 淵＝深い淀み

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

いつしかにみぞれが雨になりし時雪国に住む吾子らを想ふ

冬枯れの畑へ母とわれと来て草引きをする春の日を背に

稲吉友江

降り止まぬみぞれの雨の窓に見ゆぼたぼたの音をひとり聞きつつ

絵画展の「高知城」の前に足止めるかつてはわれも見上げたる城よ

鈴木美耶子

亡き父の三十三回忌法要を営み終へたり如月の夕べ

亡き父の三十三回忌法要にはわれの幼が座蒲団に坐りをり

吉見幸子

きりだせぬままに終はりし電話なり君と我との夜更けの会話

不定期にぽつんぽつんのメールくる君の日常われにも日常

牧原正枝

嫁ぐまで娘の着てゐし半天をなんとなくさがす寒きこの夜

祖父母われら何も言はずと決めてゐしに孫の二人の合格の知らせ

岩瀬信子

繭玉にはんなり顔の地藏さま今日も坐します我が玄関に
すずらの花の香りの線香のほひ漂ふわが部屋にまで

石田 文子

春日照るけふは三十人も集ひたり太極拳する光忠寺の境内

窓辺にて「永遠の0」に読み耽るロウバイ滲む涙のせいかも

森 厚子

今日もまた居間には我と老猫と鉛筆削るその音のみよ

霧深き白もやのなか歩みゆくこの細道をたどたととして

山崎 俊子

つつがなく今日のひと日も暮れゆきて吾の米研ぐあしたの一合

はこべらの小さき花草のこの道よあなたと歩いたあの日雨の日

三田美奈子

冬の雨降りしきる道に猫の骸むくろあるじ主なき身の命儂し

高熱にふらつきながらもわが母は付き添ひの我を案じくれたり

水野 絹子

まだ未明ほの明るきに起き出づれば窓の外には真白なる雪

雪の中を出勤せむとするわが娘にわれも同乗して送りてゆかむ

牧原 規恵

『かさね』の一句 四月号

枯野ゆく他の道なきと思ひこみ

トラックに溢るるばかり甘蔗刈

餅搗きの音の不揃ひ幼稚園

暁の山気切りさく雉の声

ボール蹴る子等の声聞く土手青む

タンポポや自生地ありて生き残り

携帯を床に持ち込む春の風邪

朝日受け霧氷輝く六甲山

五つあるベンチに五つ雪だるま

裸木となりて銀杏の瘤あらは

車窓より越後路白く冬深し

佐藤喜仙

松本周二

古川千鶴

山元正規

川井素山

田島昭久

小池清司

岡野安雅

米田文彦

長久保郁子

山本草風

海面の明かり目指して鱈来る

青木英林

よき知らせ祈る窓辺に春の雪

小柳千美子

雪まろげ手袋濡れて浸みるまで

池内とほる

店先に並ぶ野菜の春便り

森岡陽子

夜も更けて寝酒に届くイメール

丸山酔宵子

残雪に赤き素足の修行僧

田中清秀

ささくれの古き舞台や初神楽

和田勝信

本堂の木魚の響き冴返る

橋本修平

山茶花のすくと一本真つ赤なり

柳田皓一

節分や踏まれし豆に鳩群るる

後藤克彦

春の雪こころ急くとも歩の遅し

吉田博行

駅迄が雪の荒野となりにけり

長島清山

私の一首

今年の桜見られましたと眩きて祥月命日母への合掌

胃 甲 節 子

突然の母の死は四月十四日未明でした。朝五時二回目の電話に驚きと悲しみに、破れそうな胸を抱いて、泣き乍ら帰省しました。母は腹部大動脈破裂で、救急車も間に合わない大出血でした。四国に入り車窓より桜の花がまだ沢山咲いていて印象に残り、桜が咲く度母を想い掌を合わせます。私が末期癌と言われ幾度も医師より覚悟を迫られつつ、生かされて、桜への想いは強く、毎年桜の花が咲くと母への感謝と冥福を祈り、一首と致しました。

二十年風邪を引ききたることもなし肝腎腸温むるのみ

伊 与 田 広 子

私は幼い頃から風邪を引き易く春秋一回づつ風邪を引いておりました。此の温めるのは癌予防に買った超短波の器具です。超短波は一五糎程内部まで温めますので風邪を予防するようになりました。風邪を引きそうだと思えば温めれば引きません。日常生活に重宝しております。これを利用して長生きしたいと思っております。

返り花を忘れ花ともいふを知るわれはだんだん君を忘れつつ

岡本八千代

時季が過ぎてからまた花が咲くことを返り花というが、「忘れ花」ともいうことを知った。庭の木瓜の花が紅白に惚けて、蒼が一つ花二つ咲いていた。

私の連想は、すぐにある人のことを想った。それを「君」とした。友は私に「もし何かの自分の罪を感じれば、そんなことは忘れるように、忘れたということさえも忘れて生きよ」と……。その言葉は忘れないが、君（友）とはだんだんと遠い人となってしまった。

樹々高し緑は深し進みゆく伊勢の宮居の玉砂利の音

小野可南子

平成二十五年十二月号の一首です。

今年十月伊勢神宮は、二十年に一度の遷宮がありました。私は現在七十三歳、今年を逃がしたならばもう二度と、真新しい正殿への参拝は無理であろうとお伊勢さん詣りを決行いたしました。胸躍る思いに玉砂利の参道を歩き、玉砂利を踏む感触、その音に感激しきり、しかしこの一首の三句目の進みゆく・五句の玉砂利の音は、これで良かったのだろうかと思案中の私です。

ある自然科学者の手記 (24) 大橋望彦

『問答する学問』

昔に、読んだ本を見直しすると、バカに新鮮さを感じないように思うことがある。是が歳を取った証拠なのかもしれないが、観る目、感じ方が違ってくるのであろう。最近、それに近いことがあった。古い哲学書、と言っても入門書であるが、パラパラと読んでいたら気が付いた。やはり、ソクラテス(紀元前469年—紀元前399年)、プラトン(紀元前427年—紀元前347年)、アリストテレス(紀元前384年—紀元前322年)等の古代ギリシヤ哲学者は偉大であったのだ。兎も角、三人とも学問の視野が広いのに感嘆する。当時は学問分野の境が余りハッキリしていなかったとは言え、科学、宗教、政治、哲学と、それぞれの分野で、当時の先端を切つての識見を持つていふことである。そして、皆各自が自らの考えて、今でも通用する学理を展開し、たとえ師弟の關係であつても、主張するところは、チャンと主張していることである。

これまでは、学問と言うのは教えられ、学ぶものであると勝手に想っていたが、ソクラテスの定義ではそうではなかった。『学問とは師弟の間で取り交わされる問答

のことである』と言うのである。ある意味で驚きであつた。学校、大学で学問することは先生に色々と教わつていたのが、問答するなどと、そんな大それたことは、とんでもないことのように感じられたのである。弟子が師匠に尋ねることはあつても、問答することは滅多に無い。それにしても、古代ギリシヤの哲学者はもつと民主的なのか、問答が学問であると言う。誠に学者として立派だと思ふ。この問答が尊ばれた時代が別にもあつた。それは、南インド出身の中国達磨大師を祖とした、禅宗僧侶による「禅問答ぜんもんたう」である。日本には鎌倉時代頃より広まり、座禅と共に師弟の間で交わされる問答は、一種の謎掛けのような形ではあつたが、立派なデイスカッションであつた。この問答等を通して五山文学や水墨画等、禅僧による文化・芸術活動が盛んに行われるようになった。これら禅問答では主として、僧侶の悟りを開く修行で行なわれたが、修行僧が疑問を投げ掛けると、それに師匠が答える形で行なわれた。この師匠の答えが難しいと、修行僧はチンプンカンプンとなることから、判りにくい問答の事を禅問答といわれるようになってしまった。師匠の答えが難しい言い回しであつたのか、難解な答えの内容であつたのか、それとも弟子の理解力の不足から次の質問がトンチンカンになってしまったのかは良く判らない。

儒学で言う『聖人の学』は、人格を修行する意味の学

問であるが、其の後の日本での儒学者は人間の修養と共に、社会学若しくは政治の知識を深める意味も含んでいた。そして、マス・メディアの発展と共に、学問体系も変遷し、学術誌等で自分の研究した学問上の問題解決、新しい事実の発見等を公表し、認知、確認の手段として用いられるように展開し、知識の修得の意味がより強くなってきたと思われる。

ラファエロ・サンティ（1483年—1520年）の描いた有名な絵画（フレスコ画）の「アテナイの学堂」中に、プラトンとアリストテレスの二人が同時に描かれている。この絵の中で、プラトンは天を指差し虚学の象徴とされ、アリストテレスは大地を指差して立ち、実学を象徴しているとされている。この虚・実学とは、虚学が基礎科学であり、通常では社会、人文、自然科学の総称として用いられていた。一方、実学は、いわゆる応用科学で、広義で自然科学に含まれる。ここには、医学、薬学、歯学、工学等が含まれる。しかし、ここで得られた知識・技術等は、基礎科学にも多くの影響を与えている。したがって、これら何れの分野でも問答が繰り返行なわれていた。現在、科学を学んでいる研究者、学者はこの問答は必須のことであり、学会発表会は問答の場である。皮肉なことに、近頃の学会発表会では、問答と言うよりは単に是まで研究した結果の発表に止まり、質問も時間の関係で無い場合すらある。是では問答どころ

のことではない。それでも、問答が面白い会場は常に聴衆者が満員の状態となる。それが昂じて、発表者を決めて、限定したテーマで行なうシンポジウム（討論会）とか、パネル・ディスカッション（演者を限定して行なう相互討論会）とかが、単独に学会発表会とは切り放された形で催されるようになった。このように問答が拡大し、最早、師弟の間だけでなく、社会的に通常行なわれる学問的要素の高いものに発展している。

是までに、学問と言う観点で始まった師弟の問答は、討論会にまで発展してきたが、ここで再び問答は姿を変えて教育の場に登場してくる。即ち、『反転授業 (Flipped Classroom)』である。是は、最近の先端技術から生まれた「iPad」と言う小型の携帯テレビのようなもの（タブレットとも言われる）を小・中学生の個々に持たせ、学校の教場での教師の授業全てが録画され、家庭に戻って、それを見ながら復習し、宿題も行う。そして、その結果を学校へ持って行き、学校では級友、教師との間でその「Q&A」を見せ合って話し合い、勉強をする。このような形態で問答が生きている。形態は変わったが、行なっていることは、古代ギリシャの哲学者たちがやっていたことと余り変わっていない。

世界は進歩している筈だが、流転しているのであるか。

以上

絹の話 (42)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の艶出し

古来より絹はお金以上の価値を持っていました。

特に貨幣経済が未発達な飛鳥時代から戦国時代までは絹はお金以上の不思議な力を持っていました。

品、位を授けた時、田（従5位まで）、戸（従3位まで）と同時に絹布が下賜されています。また各種宴の時、臨席者に絹布が添えられる事が多かった様です。

戦国時代でも忠誠の証に金銀、絹の献上は欠かせない物の様でしたし、調略にも多用されています。

最近放映される韓国の時代劇映画でも貴族階級の祝いに、各方面から大量の絹織物が運び込まれる場面があります。ここで大事なものは、送る側にとって如何に艶やかな美しい絹を送るかが、量以上に力と誠意の見せ所であったのです。その為、古代は大陸や朝鮮半島から技術を持った大勢の人々を迎え入れ、その需要に應えていました。中世になって貿易が盛んになると、国産に勝る美しい絹を大量に輸入する様になり、平清盛や豊臣秀吉はそれを政治にも商売にも実に上手に利用した人と言える

でしょう。この流れは明治になるまで続くのです。

【繭の塩漬け】

より美しく艶のある絹を作るにはどうしたらよいか、古代から現代に至るまで、絹に課せられた命題です。艶やかな絹糸を採るのは繭の生繰り（繭の中の蛹が生きた状態）が最もよいとされているのは古今変わりません。しかし蚕は繭を作って10日前後で繭を破って羽化して来ます、そうしたら1本の長繊維としての糸は採れなくなって、その艶も衰えてしまいます。

いくら頑張っても短日の間では大量の生繰り糸を生産する事は出来ません。昨今では乾繭（中の蛹を乾燥させて殺した繭）にして、何時でも必要なとき生糸を採る事が世界の主流となっています。しかし生繰り糸ほどの艶はありません。そこで古代から何とか生繰り糸に近い艶の有る糸を常時生産する方法はないかと研究されたのが「繭の塩漬け」と云う手法でした。この方法は中国後魏（6世紀）の頃にはかなり一般化していて、乾繭よりも艶やかなばかりでなく、解舒（かいじょ…繭から糸をほぐす）し易く糸も強く、皇帝の献上用品にも使われていた様です。その方法は大甕の下に竹簾を張り梧桐の葉を敷き、その

上に繭を並べ塩を被せ梧桐を敷く、と云う事を繰り返し、最後に甕に泥の蓋をして7日〜10日おいて、蛹を窒息死させてから取り出すと云うものです。

この方法は当時としては高価な塩をふんだんに使い、労力も大変で、甕など使うため生産が上がらなく、次第に安価な大量生産が出来る乾繭に移行して行った様です。

【繭の塩蔵】

日本では繭の塩漬けの事を繭の塩蔵と言っています。が、今日は殆ど行われていません。西陣に塩野屋というおめし屋さんがありますが、16代目の当主服部さん（古く、服部性は絹織物をする渡来人？）に屋号の由来を聞いても塩蔵の事は承知していませんでした。

現在塩蔵の絹を使っているのは私の知る限り、西陣の山口織物さんの能衣装ではないでしょうか。昨今の様な照明ライトを浴びた能舞台ではなく、薪能の様な波長の長い赤いほの暗い光に浮かぶ舞台に怪しく輝くのは塩蔵の絹であったのでしょうか。（絹は光の波長により輝きに差異が生じる！今日の省エネランプは波長が短く絹は美しく輝かない）

中国では塩は海で採れるものばかりではありません、

それぞれの地域の塩を使っていた様です。それには海塩、池塩、井塩、岩塩などが記されていますが、池塩、井塩の事はどんなものか全く知りません。

西陣の山口さんは岩塩が良いと言います。岩塩の中でもヒマラヤのピンクの岩塩が最も良いと言っています。

【絹の日本の生練り糸】

今日の日本でも各地域で手作業による繭の生練りは行われています。

皇室では絹の産着を作る時、蛹を殺さなく、丈夫で艶やかな絹布を得るため、有職故実として生練り糸を使っている様ですが、一切の手順などは御用達の家に一任している様です。

繭の生練りも塩蔵も自然光やローソク、篝火にほのかに輝くもので、照明器具の発達により不要な事になりつつありますが、源氏物語や枕草子など日本の古典文学に多く出て来る色彩の表現を本当に理解するには、これらの事を目で理解する事も大切です。寝殿の欄干に後衣を垂らした公達や牛車の簾からわざと重ねた袖を外に出すなど女房たちの色彩と輝きに対する努力や如何に！

物理学者と詩歌の世界 (52)

一石

カール・セーガン

カール・エドワード・セーガン (Carl Edward Sagan 1934-1996) は、米国の天文学者。コーネル大学教授、同大学惑星研究所所長。惑星科学や宇宙生物学などの分野のパイオニア。「核の冬」、「テラ・フォーミング」などの理論の提唱者。作家、SF作家としても活躍し、多くの著作を残している。

ニューヨークのブルックリン区に生まれた。両親はウクライナ出身のユダヤ人移民。1951年シカゴ大学に入学し、物理学を専攻。1960年にはG・カイパーの指導の下で天文学と天体物理学で博士号を得ている。その後カリフォルニア大学バークレー校、続いてスミソニアン天体物理観測所で研究員を務め、ハーバード大学で教鞭をとった。それからコーネル大学へと移り、1971年には正教授に就任、以降惑星科学の研究室を率いた(参考資料1)。

セーガンは科学者、教授、作家、懐疑論者、自由思想家など多彩な顔を持っていた。以下に主な業績を列挙する。

1) 1961年セーガンが金星の環境改造に関する論文を発表。これを境に、遺伝子工学を用いて人間が居

住可能になるよう火星や金星など他惑星の環境を変化させる「テラ・フォーミング(惑星地球化計画)」が研究対象として扱われるようになった。

2) 1983年には数名の科学者と「核の冬」説を発表。

この説では核戦争が引き起こされた場合、熱核爆発により大規模火災が発生、この火災により大量の浮遊粒子が大気中に放出され、これが太陽光線を遮ることにより暗雲が長期に地球規模で垂れ込める。その間に気候の急激な変化により、地球全域に渡る生態系の壊滅的な破壊や文明の崩壊が起こると予測した。

3) 圏外生物学圏(宇宙生物学、天体生物学)の開拓者として、電波および光学顕微鏡を用いて地球外生命

起源からの信号の探査を行うSETI(地球外知的生命体探索計画)を押し進めた。

4) NASAにおける太陽系解明を目的とする無人惑星探査機計画の大半(マリナー、バイキング、ボイ

ジャーなど)の企画に携わった。セーガンは、地球外の知的生命によって発見されれば解読されることを前提に、普遍的なメッセージを太陽系外に飛んで行く探査機に搭載することを考案した。その最初の試みがパイオニア探知機の金属板であった。セーガンはそのデザインを改訂し続け、その集大成がボイジャー1、2号機に積まれた。

5) 科学啓蒙書やSF小説の執筆でも知られる。代表作

にはTVシリーズにもなった『コスモス』、その続

編『惑星へ』、映画化されたSF小説『コンタクト』や、ピューリッツァー賞を受賞した『エデンの恐竜―知能の源流をたずねて』、『核の冬 第三次世界大戦後の世界』、『はるかな記憶 人間に刻まれた進化の歩み』など多数ある。

エピソード

1) 懐疑主義者の顔を持ち、オカルトへの反駁を含む科学評論書『サイエンス・アドベンチャー』、『人はなぜエセ科学に騙されるのか』などを著した。彼は科学を「悪霊がさまよう闇の世界を照らすろうそくの光」と比喩で表現した。一方で「頭の中で考えるだけで、コンピュータの乱数発生機構に影響を及ぼすことができる」こと、「感覚が遮断された人たちが、自分に向けられた思考やイメージを受け取ることができる」こと、「ときには幼児が「前世」のことを話し出すことがあり、調べてみると「生まれ変わり」としか思えない詳しい記述」があること、以上の3点については「いまだ疑わしいとはいえ、何らかの実験的支持が得られている」ため、「真実だという可能性がある」と評している。

2) 1994年、がんを発病。闘病中にはセント・ジョン大聖堂、ガンジス川の川辺でヒンドゥー教徒が、また北アメリカのイスラム指導者が、と世界の人々がセーガンの回復祈願の祈りを捧げた。当人は宗教

にも輪廻転生にも懐疑的であったが、このような多くの善意ある振る舞いに勇気づけられたと述べている。本人は死後の魂の存在には関心が薄く、家族と子供、地球と宇宙の関わり及び人類の営みと行く末に思いを馳せながら永眠。

3)

火星探査機マーズ・パスファインダーの着陸地点は彼にちなんで「カール・セーガン基地」と名付けられた。1993年に米天文学会は「公共の科学理解のためのカール・セーガン賞」を設立。セーガンは最初の受賞者となった。またセーガンの死後米天文学会が「宇宙の研究と理解のために寄与した人物、団体に贈られる」カール・セーガン記念賞を創設。

4)

硬いイメージのある「科学」はセーガンの流暢な話術・詩的な解説にかかると身近なものとなり一般大衆を魅了した。TVシリーズ『コスモス』の視聴者が60カ国5億人に到達し、セーガンは1980〜1990年代米国で最も有名な科学者と言われた。彼の偉大さを示す1つの理由は、「追及していた物事の多面性だ」とする分析がある。セーガンの科学啓蒙書に対し、一部の科学者から起こった「科学を単純化しすぎている」という批判には、「科学者たちが考えているより、民衆は賢い」と反論した。

参考資料

1) Wikipedia, the free encyclopedia: Carl Sagan

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十五 古泉千樞

古泉千樞は茂吉よりも六歳下だったが、初期アララギにとつて重要な働きをした。年譜によると、茂吉が「馬酔木」の責任者であった伊藤左千夫を訪ねて入門したのが明治三十九年であり、そして千樞が左千夫を初めて訪ねたのはその翌年であった。

明治四十一年に「馬酔木」の後を承けて「アララギ」が創刊されると二人とも左千夫に従つてその編集に携わるようになっていった。そして明治四十四年には茂吉と千樞はアララギの実質的な編集・経営にあたつている。

蔵王の雪かがやけばわが茂吉おのづからなる涙をながす
大正四年『屋上の土』

みちのくの秋ふかき夜を善根の祖母しづかに目を眠りませり

おのづからこのうつつし世の縁つきてみ仏の国へまゐられにけり

あかあかとま昼の山の湯に浸りおのれ頭を撫でて悲しも

ふるさとのうま寝よくして長き夜のあかつきしづか

に目ざめけらしも

茂吉に関していえばこの大正四年までに生母の死、第一歌集『赤光』の刊行などがあつたのだが、千樞はそのことやアララギの仲間のことをほとんど詠んでいない。

右の五首には「茂吉に寄す」という小題がある。歌から、大正四年に祖母の死を弔うために山形に帰省したことがわかるものであることがわかる。茂吉は祖母の死を「冬の山」(『あらたま』)と題した四十八首もの大作として詠んでいるのだが、千樞はそれに全く影響されてない。それは茂吉の発表前に詠んでいるからである。「茂吉……涙をながす」「祖母……目を眠りませり」「み仏の国へまゐられにけり」「頭を撫でて悲しも」「しづかに目ざめけらしも」といった詠嘆はすべて茂吉の上を思つての表現である。言い換えれば「ふゆの日の今日も暮れたりゐるりべに胡桃をつぶす。独語いひて」と詠んだ茂吉の心に深く迫り得ているということである。

あるきたき心になりて電車を下り濠はたあるく春のゆふべを
大正七年『青牛集』

長崎の茂吉にも久にたよりせずこの濠はたの春ふかみかも

みやこべの春くるるなり遠くゐる斎藤茂吉中村憲吉

前年十二月に長崎医専教授として赴任した茂吉を詠んでいる。千櫨は前年に青山南町に転居しており、通勤に使っている市電を途中で降りて歩いたというのが一首目である。その「あるきたき心」に茂吉のこと、東京を離れて故郷に暮らす憲吉のことが浮かんだというのが二、三首目である。

みちのくを今日わが行くと告げやらむ人もあらず
ただに北行く
大正九年『青牛集』

小題に「北海道」とある。年譜、大正八年の項に「七月、水難救済会の公務で北海道各地をめぐり」とあるから、その時の歌だろう。そのころ茂吉は長崎に赴任中で、折しも咯血、転地療養の最中であつた。

つくづくと雨多き秋や大海を越えゆく君がまさきく
もあれよ
大正十年『青牛集』

大正十年十月、海外に留学する茂吉の送別歌会が開かれた。その時の千櫨の出詠歌である。この日が雨であつたことは他の参加者の歌にも詠まれている。

青田のなかをたぎちながるる最上川斎藤茂吉この国
に生れし
大正十二年『青牛集』

上の山の停車場すぎてほどもなし街道筋を人ひとり
行く
汽車に沿ひて広き街道とほりたり子どもを乗せて馬
のゆく見ゆ

この年、茂吉はドイツに留学中だった。奥羽本線上山駅を過ぎると右側に蔵王山が現れ、やがて茂吉の生家が見えてくる。さらに北上すると最上川が左側に見えてくる。茂吉が後に『白き山』で龐大な最上川詠をなすことを夭折した千櫨が知る由もなかった。

三首目はいわゆる上ノ山往還であろう。この往還もまた茂吉の歌の舞台である。

あたまはげしことなうれひそ帰り来て印旛の鰻食せ
ばよろしも
大正十二年『青牛集』

この頃千櫨は、北原白秋、前田夕暮らと「日光」を創刊する計画のためにアララギと疎遠になっており、ドイツでそれを伝え聞いた茂吉は千櫨のことを不快に思っていた。白秋等と行った印旛沼で詠んだこの歌にはどこことなく戯れ歌のおいがあるが、アララギに背くことへの後ろめたさを持てあましている心の作用によるものかもしれない。

楽しい時間 18

山本紀久雄

2014年3月31日

事件は突然やってきた。相棒の家内が突如入院となった。

その顛末を語るには、自分の経緯から述べなければならぬ。2012年12月の健康診断で「胃がんの疑いで精密検査必要」と通告され、ビックリし、急いで家に戻り、相棒に報告すると、相棒は診断した医院内の設備状況をよく知っている。そこで「あの込み入った設備の医院で内視鏡検査を受けるのは心配だ」と、ジムのサウナでよく一緒にいる女医さんに相談してくれ、別の医院を紹介受けた。

そこで早速、紹介受けた医院に行き「内視鏡検査をお願いしたいのですが」と怖ず怖ずと申し込むと、「当医院では安心して楽に行えるよう安定剤を使用するので眠くなり、検査終了後一時間ほどベッドでお休みいただきます」とのこと。

予約した検診日に、恐る恐る内視鏡検診となったが、事前説明通り眠ってしまったので、何もわからないうちに終了。眼が覚めてから診察室で院長が画像を示し「癌ではありませんがね。胃潰瘍です」との診断。二か月程度薬を飲んでくださいと言われ、真面目に飲みつづけ、心配なので一年後の2013年12月、この医院で再び健康診断受けたところ、すべての検査項目が基準値内に治まっており、胃も問題なしという結果通知書を受け取りひと安心した。

この一連の経緯を見ていた相棒、私も喉が痛くならないなら内視鏡検査を受けてみようかと、2014年2月に同医院で受けたところ、胃の中にすい臓から圧迫されている部位が

見つかり、急遽、超音波エコー検査を受けたところ、すい臓がんの疑いと診断され、すぐに市立病院の内科副院長へ紹介状を書いてもらい、検査入院したのが2014年2月24日のこと。

検査入院期間中、毎日、病院に通ったが、相棒はいたって元氣ハツツで、朝はロビーでラジオ体操、階段もエレベーターを使わずに上り下りし、退院後の足腰に気遣うという状態。

しかし、困ったのは家に残された自分。何が困ったのか。それは料理である。掃除、洗濯等は日頃から協力しているので問題なしだが、時間になると「食事ですよ」と声かけてくれる相棒がいなくなつて、一日三食考えなければいけない。入院した数日間、相棒がごまごまと配慮し、つくりおきしてくれたものを食べていたが、その在庫がなくなつてくると、自分でつくりたくないといかない。外食しようと思つたが、近所には美味いという店はさほど多くない。弱つたなあと思つた途端、はたと覚醒した。

自分はいーとぴあの辻教室の生徒ではないか！。こういう時こそ、今まで習った腕前を發揮すべきではないかと。しかし、その一方、真面目な生徒ではないので、過去のレシピは保管していい。さて、どうするか。腕組み考えていても解決策は浮かばない。図書館に行つて料理集を借りてくるか。だが、まてよ、多分、図書館のものは古いのではないか。今時の料理ではないかもしれない。その時、ひよっこり新聞記事が目に入った。

毎日の始まりは新聞を読むことからスタートする。関心あるテーマの掲載がないか探し、あれば読み、切り取り、ファイル化した今までの記事と比べつつ、組み合わせし、ストーリー作りするという作業が習慣化している。

この作業習慣テーマの中に、癌治療が加わったが、もうひとつ料理も入った。今までは辻教室の楽しい時間内のみの関心事だったが、日常不可欠な必須テーマとなったわけである。そうなる目と眼が鋭くなる。日本経済新聞という経済紙でも時折料理記事が掲載される。今までは流し読みにすぎなかったものが、重要案件記事として飛び込んでくる。

2014年3月18日の日経新聞夕刊「食あれば楽あり」に、「焼き豆腐」と「サバ」と煮付けて大変身」という小泉武夫氏の記事に吸い寄せられた。というの相棒がサバの煮付けをつくって冷凍してくれていたから、これを使って小泉氏の料理をできないか。そう思うと記事の読み方が変わる。真剣になるし、その通りつくってみて本当に美味いならさらに楽しくなるはず。そこでまずは、小泉氏の記事を紹介したい。

「我が輩のつくる焼き豆腐料理の中で、最も美味しいと思うのは、サバ(鯖)との煮付けである。サバの切り身と焼き豆腐、長ネギのぶつ切りを共にタレ(赤みそ100グラム、日本酒と味噌と砂糖それぞれ大さじ2、だし汁カップ1)でじっくりと(弱火で)煮ただけのものだけれども、これが酒の肴でもご飯のおかずでも実によく合う。なんだ、サバの味噌煮に焼き豆腐を入れたものじゃないか、という人もいるが、焼き豆腐にしっかりとサバのうま味がからまりついて、これまた絶妙なのである。

その出来上りをタレと共に皿にとり、先ずその焼き豆腐から食べる。小口に切った豆腐はしっか



りとしていて、全面に味噌ダレがべっとり付いている。それを1個、口に入れて噛む。すると、甘じよっぱい味噌ダレの味が先ず口中に広がり、次に焼き豆腐が歯で潰されると、そこから力のあるうま味が出てきて、さらにサバの濃厚なうま味と脂肪から出てきたペナペナとしたコクとがその焼き豆腐のうま味に絡み付くようにして融合し、一体となり、これが焼き豆腐なの？って思うほどの大変身ぶりを味わうことができるのである。

味噌煮のサバの方も勿論美味しいので、それではこれを肴に酒をいただきますしようと、福島の我が実家の濁り酒「泉山」原酒をコップにトクトクトクと注いで、それをコピリンコ、グビリンコと飲った。酒は急いで胃袋に達すると、その周辺をじゅんわりと熱く火照らせて、ほろ酔い加減に誘い込んでくれた。これにウーンと唸る。文章が上手すぎる。

さて、小泉氏の言う通りつくってみたのが写真。実際の量はこの二倍だが撮影のため少量にした。酒は新潟南魚沼の上善如水の純米大吟醸で試してみたのだが、実に美味い。

小泉氏は発酵学者・文筆家と紹介されている。さすがに文筆家だと思ふ。食べ物の表現、特に美味しいという中味の言い回しは大変難しい。毎日の三食で、口の中と、舌の上と、喉通りで感覚を味わっているのに、その実感官能を人にわかりやすく、成程と思わせ、状況をイメージさせるような伝え方は至難の業である。小泉氏のように書けない。ということ、今回は小泉氏の文章紹介で終わったことお許し願いたい。もう一つのお願いは、相棒が入院中なのに、一人酒で「焼き豆腐」と「サバと煮付け」を食べ「楽しい時間」を過ごした事、相棒には言わないでほしい。くれぐれもよろしく。

以上。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (22)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書―その後―

「歌よみに与ふる書」は明治三十一年二月十二日の新聞「日本」に第一回を掲載し、三月四日の第十回をもつて終っている。十回を通して一貫しているのは萬葉集と源実朝、藤原定家礼讃である。これらは子規が急に思い立って書いたのではなく、心の中で長年熟成してきた事を一気に吐き出したものであろう。

既に明治二十七年に書かれた「文学漫言」のなかで、古今調の「言葉の洒落」(粟津則雄著『正岡子規』)を乗りこえようとして歌人として、定家と実朝の名をあげている。しかし定家については「藤原定家出で、言語の洒落をやめ稍々心を趣味に傾けしかども是れ亦言語に拘泥する所ありて終に重きを趣味に置くこと能はざりき」と言及しているに過ぎない。反面実朝については「定家と同時に源実朝出で専ら万葉を学び古今独歩の秀歌をさへ数多く詠み出でたりと雖も是実朝一人が特に卓出せしに過ぎずして天下曾てこれに倣ふ者無かりしは実に真正の

歌人の世に絶えし証にして一方より見れば実朝の大見識を観るに足る」と評している。万葉以降の歌人で、子規がこれほどの評価を与えている歌人は他にいない。

一般的に子規の歌論は、一面にその広い文学観によって論をすすめ、一面には実作者としての細かい技巧論を展開しており、この「歌よみに与ふる書」はその代表的作品である。

即ち一面には文学としての常識論であるから、その内容が古びることはない。一方技巧論は、幾らか初歩的なところもあるが、これも実作の経験をもととしたものであり、また初歩的なるが故にかえって広く訴える力を持ち続けていると言えるようだ。従つてこの歌論は現在もなおその初出の時の意義を失わず、新鮮さを持ち続けている。しかもその中から新しい問題を次から次へと取り出し得る可能性を秘めていると言うことが出来るようだ。したがつて子規没後に書かれた左千夫、赤彦、茂吉らの論は、一面には非常に進歩しているようであるが、その根底にはほとんど子規の論があると言へよう。

子規はこの「歌よみに与ふる書」を実践すべく、翌三十二年十二月より自ら選者として「日本」で短歌の募集を始め、短歌革新を更に進めていった。

茅場町また亀井戸(2) 夏目勝弘

建ち並ぶ石碑を確認しつつ見て回っていると、後の方から左千夫の墓の場所を教えてくれる声があった。

墓原の隅の木々の枝の下にある。文明の歌に「ふた度の火にくづれたる墓石のはや感傷をこえし思ひす」。

左千夫の墓は膚色の古びた色の小振りな墓で左側の半ばかり大きく欠けていた。

文明の歌の「ふた度の火」は関東大震災と東京空襲の二度のことであろう。花立には香花の新しい緑が供えられてあり、嬉しくなった。

御墓の前で、しばし手を合せ佇んでいたが、牛飼の歌碑が見付からなかったことを思い出し、探すことにした。

この一首は子規に歌碑を建てるときは、この一首にすると良いと云はれた歌である。

墓原に通ずる細い道の隅に、シロのいやに繁っている一角があり、枯葉や大きな葉の重なり合っているのを掻き分けてみると、歌碑が出てきた。

墓と同じ色の大きな岩を、二つに割った三角形の巾の狭い二メートル余りの歌碑で、面は黒いそこに細い筆跡で「牛飼が歌詠む時に世の中のアたらしき歌大いに起る」と

歌碑の周囲の枯葉広葉を整理し、見えるようにし写真に納め普門院を出てきた。

牛舎のあった亀井戸はもう今の亀戸の街の家々の下である。亀井戸には左千夫と同業の牛飼が多く住んでいた。

牛舎の跡の確認はやめ、亀井戸の街をしばし巡りながら横

十間川に出た。

大洪水のなか左千夫が二十頭の乳牛を避難させた道順を辿ってみることとする。

闇ながら夜はふけにつつ水の上に

たすけ呼ぶこゑ牛叫ぶこゑ

「水害の疲れ」連作六首の一首

一時の急を免れた左千夫は、両国の知人に第二の避難を求め、家族は知人の二階へ、牛は回向院の庭に置くこととし牛の救出に向ふ。

どうしても鉄道の高架線を通らなくてはならず、本所停車場の職員に切願するも、挨拶すらない。下は水が深くて牛を牽くことができな、十分もかからないから線路を通らせてくれと。

以下「水害雑録」より(無情冷酷：然かも横柄な職員の態度である。精神奮興している自分は癩に障って堪らなくなつた。

君達は一体何所の国の役人か、此の洪水が目に入らないのか。多くの同胞が大洪水に泣いているのを何と見てるか。殆ど口の先まで出たけれど、僅かにこらへて更に哀願した。

避難者を乗せた列車が一時間後に通った後ならと、親切な一員が云ってくれた。

ここで時間を取ってしまったため日が暮れてしまう。

胸まで水に漬かりながら両国まで、二十頭を避難させた左千夫を思い横川と豎川の合流点まで歩く、ここから両国まで歩くことは無理のため、錦糸町の駅に戻り、明日行く九十九里に向う。

「氷魚」のことから (160) 岡本八千代

しみじみと160回という数字を見ている私。「三河アララギ」のおかげである。「氷魚」のことから書き出した時の私の気持ち、へんに心臓も強かったし、若かったかも。いや、正岡子規に導かれたかも?。

先回で、一応、子規の小説を読み了えたが、子規全集第十三巻小説紀行(講談社)には、子規の「レ・ミゼラブル」の翻訳文があったので、如何に載せられているのか、私なりに書いてみる。

「レ・ミゼラブル」は、日本語では「ああ無情」で有名な作品だ。子供の頃読んだが、今も思うと感動的になる。作者は、フランス人、ヴィクトル・ユゴーという人である。

ユゴーは絵画も相当勉強している。「彼のデッサンは超一流の幻想画家、非凡な才能とあますところなく示している」と。また「ユゴーのパリは文学散歩の幻にふさわしい」ともいつている。(世界文学全集43河出書房・解説より参考)

子規がフランス語訳として載せたのは、子規全集P371、「レ・ミゼラブル」十一、「彼の為す所」として、(P374までの部分である)

訳の内容は

・「ジャンバルジャンは耳を傾けた。何の音も無かった。」
「彼は戸を推した。」

に始まって、司教の家へ何かを盗みに入つてゆく処からであつた。そして彼は、

・「此蝶番いが生きて来て、恐ろしい者になって、犬の如く吠えて、人々に告げて眠りを覚まさせるのかと彼は思った。」

と、それほど小心ではあつた彼は、一歩進めて更に部屋奥へ入つてゆく。

・「ジャンバルジャンが寢床の前に立ち止ると同時に、わざとのように雲が破れて、月の光は高い窓を透して、忽ち僧正の青白い顔を照した。彼は静かに眠っている。」
・「月の光が此内部の光明に重なつた瞬間僧正は白虹の中に在るように見えた。」

・「そこには多望と信用とより外は無き一此老僧の頭と緑子の仮寝とし彼の尊き寝顔の上に言うに言われぬ莊嚴を加えた。」

そして、ジャンバルジャンは、俄に恐ろしく感じて、「今將に悪事を行おうとする際の、煩悶し動乱する良心が、善人の眠を考える事であろう。」と結んで了つてゐる。

子規の執筆年次は不明とあるが、解題には、「明治三十年の『病床手記』の十一月十六日の頃に『レ・ミゼラブル』ヲ詠ムの記事がある」とあるから、おそらくこの頃の訳らしい。

世界文学全集では井上究一郎という人の訳で、「十一彼の行為」としてP76に載せられている。――「ジャンバルジャンは耳をすました。」……また、「日光がおりてきて、いわば司教のその内部の光にかさなりあつた瞬間に、眠っている司教は神の栄光のなかにあるように見えたけれども略――一種の後光でつつんでいた。」と。二人共、神秘的な捉えかたか?

ことのはスケッチ (425) 今泉 由利

『貫名海屋 私注』⑤

富岡鉄斎。京都三条、法衣商の次男。鉄斎の父、維叙と交流のある太田垣蓮月尼。尼の一人暮らしを心配し、鉄斎を待童と蓮月宅に住み込ませた。

鉄斎は、学問のかたわら蓮月の作陶など手伝い、書画にこそしめ、人格を形成していった。

鉄斎二十代半ば、支那、阿蘭陀オランダの事情を知るため長崎へ遊学し、南宋画などを学んだ。長崎から帰り、聖護院村で私塾を開く。

鉄斎の座右の銘「万卷の書を読み、万里の道を行く」、を實踐。日本各地に旅をした。

明治七年、約四ヶ月間、北海道、東北、関東…。北海道ではアイヌの生活、風俗、「旧蝦夷風俗画」。

明治八年、富士山に登山し、その作品を数百点残している。富士山を描いた屏風「富士山図」。

教育者として、私塾立命館で教鞭、京都私立美術工芸学校嘱託教授に。

京都美術協会が発足すると、評議員に選ばれ、公職が忙しくなる。

明治天皇の命の御用画の制作。「神仙高会図」「阿部仲麻呂」を献納。

明治天皇の行幸に供奉し、鉄斎は、はじめて東京へ。明治天皇の鹿兒島行幸に随行。

鉄斎は老いるほど絵に輝やきが増し、文人画を基本に、大和絵、狩野派、琳派、大津絵など、様々な様式をもとに独自性をもった作品を数万点残す。

京都岡崎、西賀茂、聖護院村と、住居を変えた。

鉄斎の描く、聖護院村略図には、大田垣蓮月の家、黒谷通りをはさんで鉄斎の家、その近辺に、高島式部、税所敦子（歌人）、小田海僊（南画家）、中島華陽（丸山派画家）、貫名海屋（書家）：幕末から明治期にかけての文化人の住居が描かれている。

当時の京都を代表する文人たちの交遊。影響。蓮月は、庵居していた知恩院を離れ、文人墨客の踏を偲び京都岡崎へも居を移し、貫名海屋、富岡鉄斎などと交遊を深め、作歌、作陶にいそんでいたが、多くの文士、志士たちが蓮月のもとを訪れるようになると、静寂を求め北白川、聖護院、西賀茂…と移り住んだ。

鉄斎は、八十九歳になっても制作意欲はおとろえず、生涯でこの一年に一番多くの作品数を残し、もうすぐ九十歳になるうする時に亡くなった。

「胸中の山水を写す」という絵を残し。

編集室だより【二〇一四年 三月】

○目黒の林試の森。面積が12haもあり、林業試験場当時の樹木がそのまま残されていて、本当に気持ちの良い安全な公園。近くに住む森岡陽子さんが誘って下さいました。いちにはやく河津桜が咲き、小さな鶯が10羽ほど、何という幸運。

○天恩山五百羅漢寺。江戸時期、松雲元慶禅師により彫られた。羅漢様おひとりおひとりの悟られたお言葉が添えられていて、深く心に染みしました。

○小金井体育館、卓球の練習をする。時習館の同期の卓球部員が五人、元気にあばれまわれることに感激。後、小金井公園の江戸時期よりの桜の下で。

○仏像彫刻。地藏尊菩薩の仏頭を完成。感動。

○東京国立博物館へ。以前、富岡鉄斎の「富士山頂図」を観た覚えがあるので、もう一度じっくり見ようと思った。館内は「支倉常長像と南蛮美術」になっていて、「富士山図」は見られなかったけれど、「南蛮人渡来図屏風」「世界図屏風」とても興味。

○永沢まこと先生と生徒15人の絵を葉書大にした「銀座画集」を制作した。雨が降っても、風が吹いても、大変な人通りがあっても、「絵を描いてしまおう」ということを教わりました。

○東京文化会館、山岡鉄舟研究会例会、鉄舟を研究しつつ、

その背景も知りつつ、視野の広がってゆくありがたい研究会。

○柳橋でのヨガのお仲間。三宅一樹 樹の聲を聞く。銀座8丁目の「せいほうギャラリー」にて。『樹を愛で、スケッチをする。樹と対話する。樹の聲が聞こえてくる…』古木から、神様が現われ「神像彫刻」この彫刻に出会えた幸せをかみしめる。

○武蔵野段丘「国分寺崖線」の殿ヶ谷庭園へ吟行。カタクリの花、春蘭、竹林、クマザサ、湧水、鹿おどし、馬頭観音…美しく、やさしく、ほっとする。

○東京国立博物館。春と秋だけの「庭園開放散策」にゆく。いつもお世話になっている本館の裏庭にあたる。ミカドヨシノ、オオシマザクラ、ケンロクエンキクザクラ、エドヒガンシダレ、ソメイヨシノ、ロトクザクラ、ヤマザクラ、カンザン、ヤエベニヒガン。丁度満ち咲く桜の種類がこんなに沢山。

○庭園の入口辺りにあるホテル・オークラ・レストランで昼食。桜にふさわしく清潔で美味しかった。

○上野公園桜マップ。私の散歩の範囲だから知っていると思っていたのだけれど、花咲いて気付く桜の種類が多種類でした。どんどん新しい桜を造ってきたんですね。

○旧岩崎邸庭園。一つ昔が過ぎ去った様子を、その歴史に少しばかり入ってゆく厳かな経験でした。ここに関係のある小岩井牧場は、曾祖父が場長をしていたことを思い出した。

和菓子街道 (91)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(14)

赤い欄干のかかる橋を渡ると、松坂宿に入る。城下町であり宿場町で、三井家や小津家などの豪商の屋敷や古めかしい商家が建ち並び松坂(現松阪)の基礎を作ったのは、天正16年(1588)に松坂に移封した戦国武将の蒲生氏郷だ。

城下町を作るにあたって、氏郷はそれまでの領地であった近江日野から多くの商人を呼び寄せた。そのひとりが、氏郷の父・賢秀の代から菓子匠として蒲生家に仕えていた柳屋奉善の初代だった。

柳屋奉善の創業は日野時代の天正3年(1575)頃。初代の頃からあるという代表銘菓「老伴」は、柳屋の岡家の家宝で、硯に転用された前漢時代の軒瓦をモチーフにしたもの。厚めの最中の種に羊羹を流し込んだ古鏡のような美しい菓子だ。



氏郷は利休七哲のひとりでもある茶人。「老伴も氏郷の茶会に出されたかもしれませんがね」と十七代目当主。なるほどそうかもしれないと頷いた。

しっかりと炊きつめた羊羹を流し込んだ老伴は、ずっしりと重い。

◆柳屋奉善

住所：三重県松阪市中町1877

電話：0598-21-0138

お知らせ

▽六月号の原稿は、五月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△心弾む新緑の季節となりました。お出かけになる機会も増え、色々な自然に出会い、歌に詠む事柄も多様になることかと思われます。

また、反対に出かけなくとも歌は詠めるということも事実です。子規もそうですが晩年の御津磯夫先生もしかりです。歌は生活の中、心の中にもあるのだと思います。五月号の感銘歌を選んでいましたら、御津先生の八十五歳の誕生日のお歌がありました。

会員の方の中には八十五歳を越えておられる方もいらっしゃるでしょうが、先生はこの第十歌集の後にも多数の歌集を出されています。衰えることのない歌を次々と生み出された先生のその創作意欲にはただただ感服致します。死ぬまで歌人であることをモットーに歌を詠み続けてゆきたいものです。

平松

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二万円、一カ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することが出来る。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年四月二十五日印刷 第六十一巻 第五号
平成二十六年五月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

三河アララギ会

〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

UR L Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美